

(3)山と里の信仰と交流が培った歴史文化

丹後地方唯一の国宝絵画の普賢延命像^{ふげんえんめいぞう}などを所蔵する松尾寺や重要文化財の三重塔が存在感をみせる金剛院など内外から多くの参拝者を数える寺社、そこでの祭礼などが現在も継承されている。

一方、田口神社や弥加宜神社^{みかぎ}など複数の村々にまたがる氏子圏をもつ、地区の中心的な神社では京都府指定・登録の本殿や拝殿^{みかど}が残り、そこで繰り上げられる仏事や祭礼芸能も深い信仰を物語っている。

各集落では、山や里の収穫の豊穰を祈り、産土の神社の祭りを持続している。加えて、地藏盆が継承され、どんど焼(とんど焼)や虫送りなど季節毎の行事や、仏像を祀った辻堂での交流が連綿と続いている。

また、地域ごとに語り継がれてきた「むかしばなし」は村々の伝承を次世代へと伝える役割を果たすなど人々の深い信仰のなかで守られ、培われてきた歴史文化が今も継承されている。

このように舞鶴は、山と里の信仰と交流が培った歴史文化ストーリーを市内各地で紡ぎだしている。

ストーリーを構成する主な歴史文化遺産

松尾寺及び国宝絵画・彫刻・庭園	松尾寺の仏舞	瀬崎ミカン
金剛院塔婆及び重文絵画・彫刻	産土神社の祭礼	万願寺甘とう
圓隆寺重文彫刻	集落の地藏盆	佐波賀だいこん
辻堂の彫刻・工芸品	虫送り・どんど焼	
田口神社等の本殿・拝殿	月待ち・お日待ち	
伝 安寿姫塚などの宝篋印塔	宮講	
油江・二ノ宮経塚	城屋の揚松明	
旧上野家住宅	お松行事	
行永家住宅	糸井文庫	
水口家住宅	安寿と厨子王伝承	
福谷家住宅	地頭太鼓・大俣太鼓(酒吞童子伝承)	
西野家住宅	きつね狩り	
荒木家住宅	山の神祭り	
	大蛇退治	

ものがたり3：山と里の信仰と交流が培った歴史文化

〇信仰が育んだ歴史

舞鶴市の大部分は山地や丘陵によって占められ、河川や古くからの道筋に沿って農村集落が点在している。市内に現存する歴史文化遺産の数々は、自然に対する信仰が形を成したのも多く、その時代を映し出す貴重な資料である。

舞鶴の信仰の歴史は、桑飼下遺跡から埋甕や岩版、土偶が発見されたことから縄文後期に遡る。

縄文末期、大陸から水稻耕作が伝わると、豊作や収穫を祝うまつりが行われるようになった。志高遺跡からは、まつりに使用されたと思われる銅剣形石剣が出土しており、これらのまつりを司る、巫女や村オサのような有力者の存在が推測される。

飛鳥時代から続く薬師信仰に加え、平安時代には観音信仰が広まり、西国三十三所巡礼のもととなる霊場巡りが始まった。多禰寺は用明天皇第3皇子麻呂子親王の開基と伝え、金剛院は高岳親王の開基、鳥羽天皇のあつい信仰を受けたと伝えている。また、圓隆寺は皇慶(谷阿闍梨)が中興したとされ、重要文化財に指定される平安時代の阿弥陀如来坐像などを伝えるなど今の舞鶴を代表する寺院は、この頃に建立されている。

寺社仏閣では、建造物をはじめ、仏像や奉納品など数多くの舞鶴の「たから」が守られてきた。

市内の神社は、式内社をはじめ1000年以上の歴史をもつものも多く、信仰の対象として、地域の人々に守られてきた。1300年余り前に草創されたとされる田口神社の本殿は、明和3年(1766)に藩主牧野氏の寄附により建立され、舞鶴を代表する神社建築として貴重である。

金剛院の執金剛神立像、深沙大將立像、松尾寺の阿弥陀如来坐像は、快慶作のものである。その他、多禰寺の金剛力士立像(仁王像)、圓隆寺の毘沙門天立像など、鎌倉時代を代表する仏像が多く残されている。

金剛院には南朝の後醍醐天皇の皇子護良親王が近隣の武士が境内の木を伐採することを禁じた制札が残されている。登尾八幡神社には南朝年号が刻まれた御正体鏡がある。岡田由里の荒針城では南朝・北朝の軍勢が合戦したことが史料に記されており、南北朝時代の動乱に巻き込まれた往時の様子が察せられる。

また、道端にある阿弥陀の板碑などの石造物は、民衆によって守り残されたものも多い。各地に辻堂が現存し、現在も地域の交流の場として、儀礼の場として利用され、地域の人々の生活一部として根付いていることは、舞鶴の大きな魅力といえよう。

〇各地域が継承してきた祭礼芸能・伝統行事と昔話

市内には各地域に先人から受け継いできた数多くの祭礼芸能や伝統行事等が残されており、寺社の祭礼として受け継がれたものも多い。松尾寺に伝わる「仏舞」は、釈尊の降誕日である旧暦の4月8日(現在は5月8日)におこなわれ、仏面をつけた舞手が典雅でゆるやかな舞を繰り返す。京都府では舞楽付き法会の流れを伝える唯一のもので芸能史にとって高い資料的価値をもつ。雨引神社の「城屋の揚松明」は、盆の精霊火のひとつとされ、その起源は大蛇退治伝説とも雨乞い説ともいわれている。16メートルの大松明に小松明を投げ入れ、火の粉の舞う光景は、勇壮である。西飼神社で奉納される「地頭太鼓」「大俣太鼓」は、源頼光の大江山鬼退治伝説に由来する太鼓芸である。

地域には、生活の一部として継続されている行事も多い。盆行事、地藏盆、どんど焼きや虫送りなど季節ごとの行事のほか、集落から害獣を除く目的でおこなう「きつね狩り」、山の神に無病息災を祈る「山の神祭り」など、山と里との関わりから生まれた行事も受け継がれている。

また、各地域では特色ある昔話が伝承され、地域のアイデンティティとなっている。糸井文庫には舞鶴に関連する三庄太夫や酒呑童子の錦絵や書籍があり、その他にも西国三十三所巡礼関係の資料など、当時の世俗・風俗を知ることができる。

寺社でおこなわれる祭礼から、地域の生活に密接に関わる行事・物語と、多種多様な祭礼行事を継続するために、各地域では宮講が組織されており、地域コミュニティの強さを物語っている。

〇里の生活

舞鶴の古民家は、祖先から受け継いできた生活の知恵がうかがえるものである。

小倉村で大庄屋を務めた行永家の住宅は、丹後地方における棧瓦葺き民家の初期の遺構として貴重であり。江戸時代後期に建築された水口家住宅、幕末から明治に建築された西野家住宅、福谷家住宅、江戸時代中期に建築された荒木家住宅など、今も貴重な民家が保存されており、往時の生活を感じることができる。また、西方寺村で大庄屋を務めた旧上野家の江戸時代後期に建築された住宅「大庄屋 上野家」は、地域の活動の拠点として活用されている。

また、舞鶴には、豊かな自然が育んだ里の幸がある。100年程前に万願寺で誕生したとされる「万願寺とうがらし」(現在は「万願寺甘とう」)、舞鶴市固有の特産物であり京の伝統野菜である「佐波賀だいこん」などがあげられ、舞鶴で収穫される食の魅力を、全国へむけて発信している。

〇山と里の信仰と交流が培った歴史文化

舞鶴の人々は、山と里の恵みを受け、地域内外と交流を育みながら歩み続けてきた。自然に対する深い感謝の心が生み出した信仰は、伝統行事として数多く伝承されており、舞鶴の魅力を創出している。

表 3-3 主な歴史文化遺産の概要（山と里の信仰と交流が培った歴史文化）

松尾寺の国宝絵画 および彫刻・庭園	丹後と若狭を隔てる霊峰青葉山の中腹にあり、西国三十三所巡礼29番札所の観音霊場である。唐僧威光上人が和銅元年(708)に開山したと伝え、泰澄上人の白山信仰の伝承ももつ。さらに、正暦年間(990～995)には、春日為光が本尊馬頭観音を刻んだといわれている。
金剛院塔婆および 重文彫刻	金剛院は、志楽谷の東南にあり、平城天皇の皇子高岳親王によって平安初頭に開かれたと伝えられ、白河天皇が中興した。金剛院塔婆は、柿葺きの三重塔で総高24mを測る。永保2年(1082)高岳親王の菩提のため白河天皇が建立、久安2年(1146)美福門院が平忠盛の奉行により修復したと伝える。近くに高岳親王の墓と伝わる供養塔がある。
圓隆寺の 重文彫刻	長徳年中(995～999)天台宗の谷流の祖・皇慶上人が開基した。この地方の豪族田辺小太夫秀武が上人を敬って70の院坊や三重塔などを整えたが、文禄4年(1595)8月10日の大雨による山崩れで一山は壊滅、わずかに4坊を残すのみとなった。さらに万治2年(1659)門前からの出火によって堂塔を失ったが再建し、草創に近い時期の仏像を今に伝えている。
田口神社等の 本殿・拝殿	本殿は、明和3年(1766)田辺藩主牧野惟成を大檀那として造立された。三間社流造、正面軒唐破風付、柿葺で、装飾の彫り物や、木組みの技巧など代表的建物である。拝殿は舞殿とも呼ばれ、棟札によると寛政8年(1796)に完成した。桁行2間、梁行1間、一重、入母屋造、棧瓦葺である。本殿同様この地方の代表的建物である。
伝 安寿姫塚の 宝篋印塔等の 石造物	伝安寿姫塚は、市の文化財に指定される日引石製の宝篋印塔。総高163cmで、欠損している相輪上部を推定すると総高180cmを超す大型の石塔である。室町時代の秀作で、下東では、この塔を安寿姫供養塔として手厚く守ってきた。地元には江戸時代初期より説教師「さんせう大夫」が伝えられており、石塔本来の価値に加えて民俗的にも貴重である。その他、海臨寺・久田美の宝篋印塔、安岡十三仏笠塔婆などの市の文化財に指定される中世の石造物や未指定の板碑等が守り残されている。
旧上野家住宅	西方寺に建つ、江戸後期の建築。農家の住宅。主屋を中心に、納屋、数棟の土蔵群からなり、屋敷地正面から東側面にかけて長大な塀が巡らされている。東北後方には屋敷神(荒神さん)が祀られている。外観は、主屋は茅葺きで棧瓦葺きの下屋庇が四周する。奥座敷は大正時代の増築になる。国登録有形文化財。
松尾寺の仏舞	松尾寺に継承されてきた会式で、釈尊の降誕日である旧暦の4月8日(現在は5月8日)におこなわれる。大日・釈迦・阿弥陀の各如来2人ずつの仏面をつけた舞手が典雅でゆるやかな舞を繰り返す。京都府では舞楽付き法会の流れを伝える唯一のものであり、芸能史にとって高い資料的価値をもつ。
城屋の揚松明	城屋の氏神である雨引神社で8月14日におこなわれる。境内広場に柱状の大松明を立て、中央に据えた逆円錐状のオガラ束に小松明を投げ入れ点火する。御幣の倒れる方向で稲の豊凶を占う風もある。このような柱松明形式の火祭りは府内各地でみられるが、愛宕信仰と関連している。しかし、ここ城屋は雨乞の習俗と習合して氏神行事となったもので貴重である。
地頭太鼓・大俣太鼓	地頭太鼓は、氏神である西飼神社などで奉納される。大江山の鬼退治にむかった源頼光一行の戦勝を祈願して打った太鼓が伝承されているといわれる。太鼓芸で、戦勝を祈る意味からブチ(擁)は下へは向けず、上へ上へと打ち上げる。 大俣太鼓は、西飼神社に奉納され、源頼光一行の凱旋を祝ったといわれている。伝統芸能と鬼退治伝説が太鼓という形で定着したものである。一人打ちから舞い打ち、合打ち、まわり打ち、「ヤリベス」という師匠格の打ちで終わる。
虫送り・どんど焼	虫送りは、ズイムシの最も発生する7月初旬の夕方に、稲の虫送り、虫供養といって、村中で松明をともし、鉦・大鼓・柏子木・笛などを鳴らし、大声をだして村外れまで行進し、虫を送った。 どんど焼き(とんど)は、1月15日の朝、注連縄や松飾りなどを各戸から持ち寄り、地区の決められた場所で燃やす。どんどの灰はもち帰って、魔除けのまじないとして使われる。
月待ち・お日待ち	月待ち・お日待ちは、1月、5月、9月に、講仲間が集まってお籠りする行事。氏神か寺を宿に定めて集まる。日の出、月の出を拝むもので、一夜眠らずに、精神潔斎に基づくお籠りであり、禁忌が厳しく定められている。
宮講	村の氏神祭りを中心とする。戸主の集まりで多くの地区に組織されている。
きつね祭り	とんどの後、14日夜から15日朝にかけておこなわれる行事。昔から、害虫を除く目的でおこなう予祝行事である。「狐がえり候…」と大声で怒鳴りながら地域を回る。男の子の行事である。
山の神祭り	山の神は、山を支配する神のこと。各地で祭りの内容は異なる。山の産物を神殿に備え、貧乏な山の神を山に返すものや、ケンチンや大根の味噌だきで会食するものなどがある。
大蛇退治	城屋の揚松明の起源のひとつが大蛇退治伝説である。弘治2年(1556)一色氏の家臣・森脇宗坡は、娘を飲み込んだ大蛇を討ったあと、これを3つに切断。そのうち、頭部を祀ったのが城屋の雨引、胴部を祀ったのが野村寺の中ノ森、尾部を祀ったのが高野由里の尾の森の各神社といわれる。揚松明はこの大蛇の供養、または大蛇の物凄さを象徴したものとされるが、この起源説は揚松明に付会したものと思われる。
糸井文庫	丹後地方に関する錦絵や古文書・記録、絵図、書籍、郷土玩具など約2200点におよぶ地域資料群。丹後地方の伝説に関する錦絵や書籍・記録等の総合的蒐集にかけては全国に匹敵するものがなく、地域性豊かなコレクションが地元舞鶴に残ることも高く評価されている。これらのなかには、三庄太夫伝説には和江・中山が登場し、大俣太鼓・地頭太鼓は、源頼光の鬼退治(酒呑童子伝説)に由来すると伝わるなど、舞鶴に関わる伝説を題材としたものも多い。また、西国三十三所巡礼29番札所松尾寺に関する資料や田辺藩の家老で儒学者の野田笛浦や田辺出身の蘭学医・新宮涼庭、いちちやく海防の必要を説いた幕末の田辺藩士・嶺田楓江に関する著書・伝記・墨蹟など舞鶴に関係する近世・近代の資料も多数収蔵されている。
万願寺甘とう	大正末期に、万願寺で栽培されたのが始まりと伝えられ、長い間おもに農家の自給用であったのを昭和58年(1983)からJAで販売を始め、平成元年(1989)には特に優れた京都の伝統野菜として「京のブランド産品」第1号に認証された。さらに平成29年(2017)「地理的表示(GI)保護制度」に京都府内で初めて、野菜としては近畿圏で初めて登録された。
佐波賀だいこん	昭和30年代には舞鶴市の特産物として盛んに栽培されたが、次第に生産者が減少し、ほとんど生産されなくなった。在来作物の良さや伝統を守り続けることの大切さを伝えていくため、平成22年(2010)から京都府が保管していた種子を用いて、生産を復活させる取り組みを開始。本格的に生産・販路の拡大、情報発信等に取り組んでいる。



金剛院塔婆(三重塔)



伝 安寿姫塚の宝篋印塔等の石造物



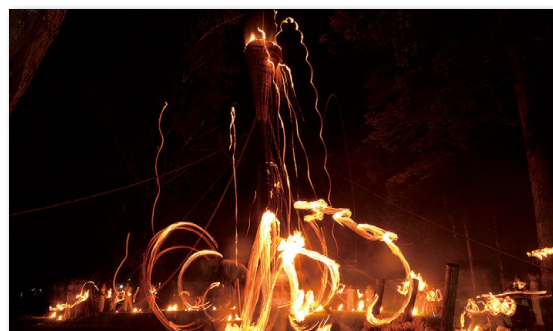
西国三十三所巡礼 第29番札所松尾寺



松尾寺の仏舞



旧上野家住宅



城屋の揚松明

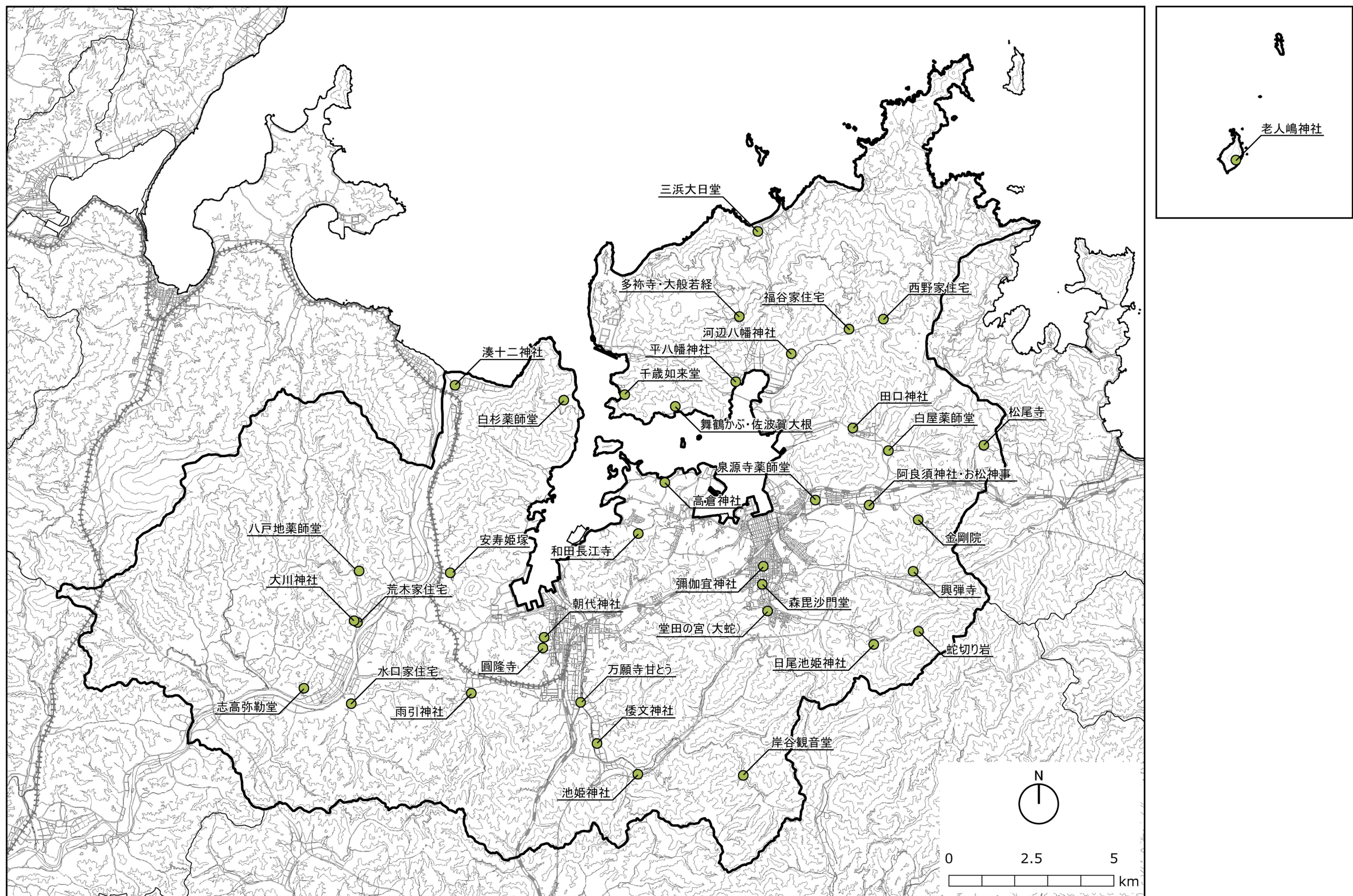


地頭太鼓(左)・大俣太鼓(右)



万願寺甘とう・佐波賀だいこん

図 3-12 主な歴史文化遺産（山と里の信仰と交流が培った歴史文化）



(4) 近世城下町と里によって形づくられた歴史文化

海に面した城下町としての舞鶴の歴史は、細川氏による田辺城の築城と城下町建設に始まる。その後、京極氏による田辺城拡張と破却、牧野氏による再築を経て、城下町が発達した。

近世には、高野川に架かる田辺大橋を起点として京街道・若狭街道・宮津街道・河守街道の4街道が整備され、陸上交通が発達した。また、海上・河川交通も発達し、藩領の経済の中心地として物資が集積した竹屋町など高野川沿いには商家が立ち並び、日本海交易の拠点としても賑わいをみせた。

一方で田辺藩領の村々は計8組の大庄屋組に組織され、各組には大庄屋が任命された。大庄屋のもと、村ごとに庄屋・年寄といった村役人が置かれ、各村では村役人を中心に共同で年貢納入の責任を負い、寄合で村の重要事項を協議決定するなど自治的な共同体運営をおこなっていた。

城下町と陸海上交通の発達にともない、内外との交流が進展し、朝代神社の芸屋台などの町人文化が花開いた。また、瀬崎の^{せざき}人形浄瑠璃にみられるよう、周辺の村々でも近世の町人文化や文芸を受け入れ、それぞれに展開させていった。このように、田辺城下を中心に周辺の村々において発展した歴史文化が現在の地域の特色につながっている。

ストーリーを構成する主な歴史文化遺産

田辺(舞鶴)城趾	朝代神社の祭礼	宮津街道	高野川
城下の町割り	平野屋太神楽	京街道	真名井の清水
江戸時代の町名	芸屋台	若狭街道	伊佐津の御水道
渡邊家住宅	田辺城まつり	河守街道	宮谷神社の吐月水
林田住宅	吉原の太刀振	一里塚・道標	
土井家住宅	瀬崎の人形浄瑠璃		
今安家住宅			
水島家住宅			

ものがたり4：近世城下町と里によって形づくられた歴史文化

○田辺城築城

舞鶴の西地区は、東は伊佐津川、西は高野川、南は湿地、北は海に面する天然の要害であった。戦国時代、京滋と丹後との地理的位置の優位性から、天正10年(1582)頃から細川氏によって田辺城の築城が始まり、城下町が形成された。数百年にわたって、舞鶴湾沿岸の農漁村として、また、稲作を中心とする農耕生活が営まれていたこの地域に、満々と水をたたえた堀と、高く築かれた石垣、漆喰塗りの白壁で構成された城郭の突然の出現に、当時の人々は大変驚いたであろう。完成した田辺城は、その優美な姿から舞鶴城とも呼ばれ、現在の市名の由来となっている。

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの前哨戦として、徳川家康に加勢した細川氏と石田軍による攻防戦が、田辺城にて繰り広げられたが、「古今伝授」を伝える細川幽斎の討ち死にを惜しんだ後陽成天皇によって、50日余りにわたる田辺籠城戦は終わりを告げた。田辺城跡からは、多数の鉄砲玉のほか、天守台跡が確認されており、籠城戦の凄まじさを肌で感じることができる。また、舞鶴公園には、古今伝授の碑が建てられ、幽斎の命を懸けた決意を伝えている。

その後、細川氏、京極氏、牧野氏の3氏によって、舞鶴を含む加佐郡は統治された。明治6年(1873)、田辺城は廃城となり、本丸付近は舞鶴公園として整備された。公園内では田辺城門が復元され、歴史の雰囲気を残しつつ、美しい庭園や公園が整備され、市民の憩いの場として親しまれている。また、田辺城資料館では、細川幽斎を中心とした歴代城主や、城下町田辺の歴史に触れることができる。

○城下町の成立

田辺城の築城と同時に、周辺地域は町割りをもとに城下町が形成され発展した。

まず、城内や城の近辺に上士が、城から離れるに従って、中・下士がそれぞれ屋敷を構えた。

次に、城下の繁栄を図るため、丹波・若狭方面から商人・職人を招き、本町・平野屋に商人・職人を住まわせることで中核が築かれ、その後、丹波町・竹屋町がつくられたことによって、城下町の骨格が形成された。

江戸時代には、北前船など日本海交易の拠点として、また、整備された諸街道が集まる陸の要所として、商工業を中心とする産業港湾都市としても栄えた。高野川河口に位置する竹屋町は、藩内の商品流通を全国の市場へと結びつける交易の要であり、竹屋町にある渡邊家住宅、丹波町にある今安家住宅など、重厚な町屋の点在する風景は、城下の商人町の面影を今に伝えている。

山沿いには、城や商人町を守るように、お寺や神社が数多く建築され、寺町が形成された。

城下町の産土神である朝代神社の祭礼では、「朝代神社祭礼絵巻」にみられるように、城下町の人々が一斉にくりだし、芸屋台をひき、太鼓を打ち、祭りを楽しんだ。瀬崎には人形浄瑠璃の道具が伝存しており、昭和初期まで神社の舞堂で盛んに演じられていた。

歴代の藩主との関わり深い寺社も多く残されている。このうち、松尾寺は、織田氏の兵火をはじめ、度重なる火災にあったが、細川幽斎や京極家、牧野家によって復興、修築され、今もその姿を残している。

西地区に残る寺社は、民衆の信仰の場であり祭礼を楽しむ場として親しまれ、歴代藩主からの崇拝が厚く、その寄附を受け崇高な場として大切に守られてきた。

江戸時代中期・後期になると、年貢を増やす目的で、藩は新田開発に力をいれた。東地区では浮島周辺に大規模な新田開発がおこなわれ、西地区では喜多村の海面を埋め立てて新宮新田が造成された。

新田開発によって農業生産力が向上し、経済的に豊かになった民衆は、旅や祭りといった娯楽や教養を求めた。その頃の流行であった、西国巡礼や伊勢参宮などの信仰の旅を通して教養(農業改良の情報収集など)を仕入れ、都市の文化を地方へ伝播する役割をも果たした。

舞鶴港(西港)は、昭和に入ると、北海道、樺太、朝鮮、大連、天津間にそれぞれ定期航路をもつ商港となり、舞鶴市のなかでも特徴的な発展を成し遂げてきた。

現在でも、西地区では近世に形成された城下町が基盤となっており、往時を偲ぶことのできる風情ある都市の景観が、舞鶴の魅力となっている。

○近世城下町と里によって形づくられた歴史文化

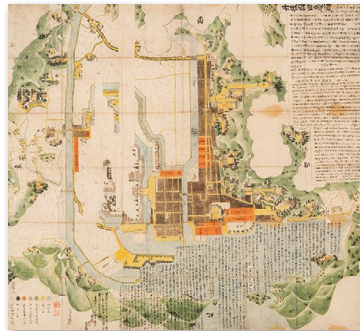
西地区は、田辺城の築城と城下町の形成によって、海と陸の要所として商工業を中心にした独自の発展を遂げ、周辺の里とともに現在のまちづくりの土台をつくり上げた。現在も城下町の風情を感じさせる町並みや周辺の里山の風景が広がっており、城下町と里を活かした観光の躍進へとつながっている。

表 3-4 主な歴史文化遺産の概要（近世城下町と里によって形づくられた歴史文化）

田辺(舞鶴)城址	天正8年(1580)に入国した細川藤孝(幽斎)、子忠興によって築城された。本丸を中心に、二ノ丸、三ノ丸がある輪郭式の平城で、東に伊佐津川、西に高野川、南は湿地、北は海に接した要害の地に築かれた。城跡からは、天守台跡、鉄砲玉などが検出されている。現在この城の本丸跡には、舞鶴公園が整備され、復元された田辺城城門、彰古館、幽斎ゆかりの心種園もある。 [出典：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター資料]
城下の町割り	城下町は、城内や城の近辺に上士、城から離れるごとに中、下士が屋敷を構えた。領内外の商人・職人は城下に集住させられ、職種ごとに町を形成した。町外縁部に寺院を配置し、河川、堀、土居で城下を囲んだ。江戸時代に描かれた田辺籠城図から、町用地は東西5筋・南北4筋(京極氏は南北6筋)の道路により長方形に区画されていることがわかる。
江戸時代の町名	魚屋・丹波・本・平野屋・竹屋・職人・吉原など、江戸時代から使われてきた城下町の町名が今も残されている。
渡邊家住宅	竹屋に建つ幕末から明治初期の建築。城下町の町家。屋号は「安久屋」。外観は、切妻造り、棧瓦敷き、2階建て。渡邊家は廻船問屋を開業したのちに蛸燭、石炭、煉瓦なども手掛けた。高野川に面して、煉瓦で高い基底部を築いた近代的な意匠の新蔵が建っている。国登録有形文化財。
水島家住宅	伊佐津に建つ、明治31年(1898)の建築。近代をひもとく住宅。元舞鶴町長・市長水島彦一郎氏宅。周囲に石垣を積み、東に薬医門を開く。長大でゆるい反り屋根の主屋を中心に、周囲に茶亭や離れ座敷、土蔵などを配し、塀で囲まれた、旧庄屋の風格が漂う屋敷構えである。
朝代神社祭礼	朝代神社は城下町田辺の氏神である。祭礼には、城下の吉原から太刀振が、平野屋から太神楽がそれぞれ奉納される。江戸時代に描かれた「朝代神社祭礼絵巻」では、武士も町民も城下あげて祭りがおこなわれ、城下各町は太刀振、太神楽、芸屋台での子ども歌舞伎などの出し物を競い合い、町人文化の華が咲いた様子が描かれている。
芸屋台	朝代神社の祭礼で使用された、子ども歌舞伎用の舞台のこと。昭和初期まで毎年、芸屋台を所有する地区が年番を決め、装飾や子ども歌舞伎をおこなった。江戸時代に制作された芸屋台もあり、現在も祭礼で使用されている。
平野屋太神楽	朝代神社祭礼で奉納される太神楽。元禄年間(1688～1703年)には、すでに祭礼の主要な部分となっていた。平野屋には、太神楽で使用される獅子頭・太鼓・輿のほか、囃し唄の唄本や「傘の曲」に使われる傘など、江戸時代より伝わる資料が残されている。
吉原の太刀振	朝代神社の祭礼などで奉納されるもので、田辺籠城戦の際、吉原の漁民もこれに加わり、その奮戦の様を武道の型として伝えたものといわれている。舞鶴市は、江戸時代から各村で太刀振(振物)が盛行したが、吉原のものが最も形として整い、代表的なものである。
田辺城まつり	舞鶴公園一帯とその周辺で開催されている、田辺城の歴史を知るイベント。細川幽斎の田辺籠城戦をまつりの柱として構成されており、幽斎歌舞伎、武者行列、和太鼓演奏、おみこし、芸屋台の展示などもみられる。
瀬崎の人形浄瑠璃	瀬崎では、江戸末期から大正期まで人形浄瑠璃がおこなわれていた。当初は、若中(青年団)によったが、明治以降は有志による芸団的な組織になった。今も人形浄瑠璃の用具が残されており、40点を占める首には、阿波の名人形師人形忠(清水忠次郎)などのものもある。
宮津街道	大手門から中山村で大雲川(現由良川)の右岸に達し、ここから対岸の和江村に渡り、田辺領と宮津藩領の境にある長尾峠を越えて、宮津藩に入る。この道は、幕府巡見使の通る道であり、成相寺から松尾寺への巡礼の道でもあった。
京街道	田辺から京都への道。田辺大橋から真倉村に入り、丹波国黒谷村(現綾部市)、園部(現南丹市)、亀山(現亀岡市)を通り、老の坂を越えて京都に入った。この道は、参勤交代の道筋でもあった。
若狭街道	田辺城下から若狭国へ通じる道。城下大内の二ツ橋より白鳥峠を越え、丹後・若狭国境の吉坂峠に達し、若狭へ入る。別名北国街道とも呼ばれた。青葉山の中腹に建つ松尾寺への巡礼者の道としても知られ、巡礼道を裏付ける道案内の道票が今も街道筋に数多く残り、往時の賑わいを感じさせる。
河守街道	田辺城下引土より八田峠を越え、高野谷に入り、真壁峠を越え、由良川筋を遡上して河守(現福知山市)に至る街道。幕府巡見使の通る道であった。
一里塚・道標	江戸時代、五街道が整備され、路傍に一里塚が設けられた。また、一里塚以外の道標、街道追分口の石柱や庚申塔・道祖神碑・地藏・石灯籠など、安全な交通を祈る信仰を兼ねた道標が建てられた。
高野川	全長5,536m。かつての河道は、茶臼山以北において今よりやや東寄りを行っていたようである。近世においては、田辺城の総堀としても用いられた。また、河口部には港が置かれており、各地より運ばれてくる産物の保管倉庫も建てられていた。



田辺城趾(舞鶴公園)



丹後国田辺之図



芸屋台



朝代神社祭礼絵巻(平野屋太神楽部分)



吉原の太刀振



瀬崎の人形浄瑠璃用具



一里塚・道標



高野川倉庫群

図3-14 主な歴史文化遺産(近世城下町と里によって形づくられた歴史文化)

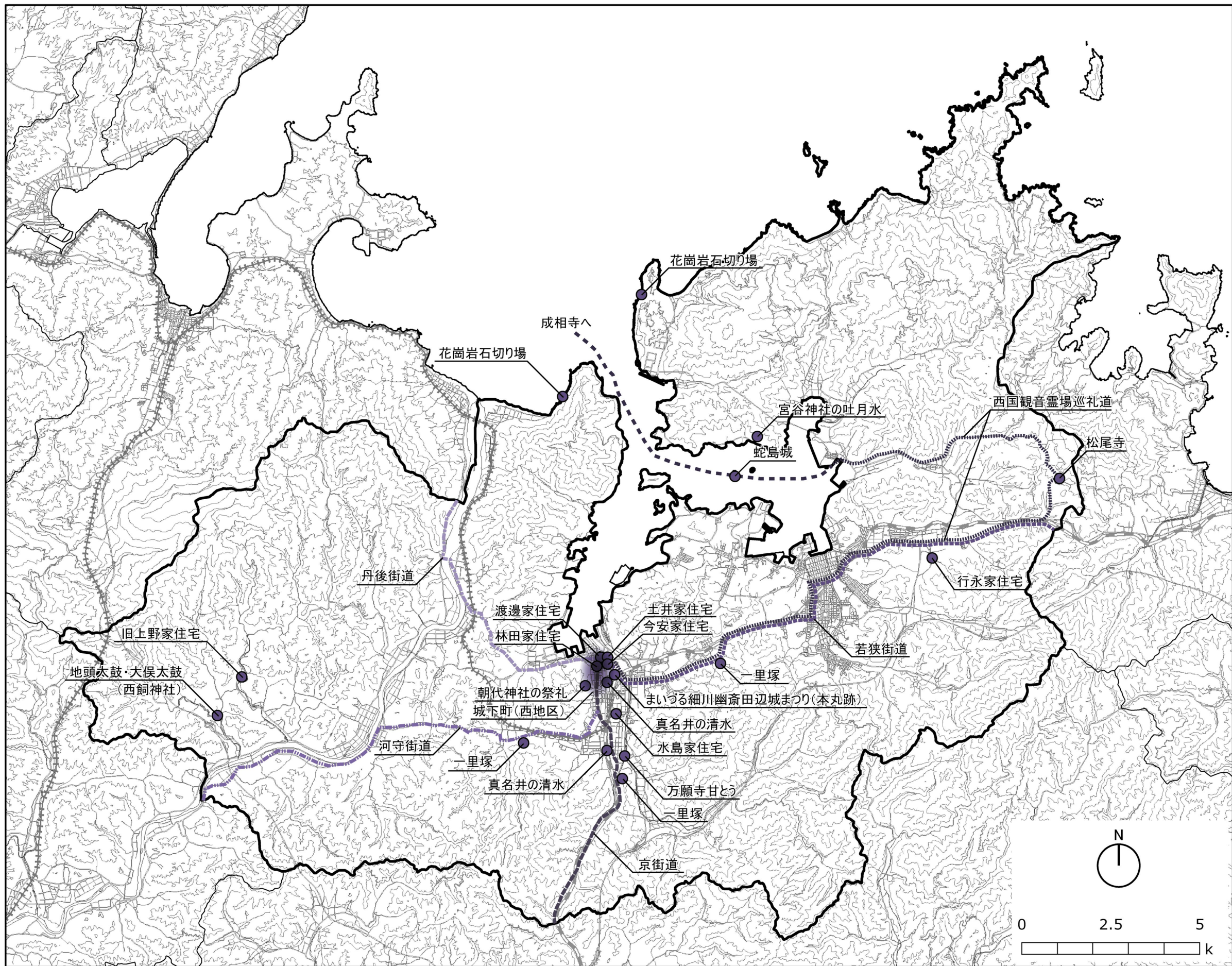


図3-15 近世城下町と里によって形づくられた歴史文化